扶桑

近代艶隠者

五

へ13
3265
5

特 へ13 3265 5

近代艶隠者　巻五

目録

一　千年の亀島　菊乃翁

二　一束揃かる童　網すきの浦人

三　時れの切火縄　流し船乃売人

文庫

四　禁中の草枕　鞆乃暁月

五　名ハ埋まぬ石塔　備前の水波

一　菊の若菜

武蔵乃かゝる所に志あらしハ菊を愛でめでたき西国
行脚の物語して人をも慰んとかく書捨るもはかなや
むかし筑紫に結びし草庵とふりしは西ハ宰府乃
乃斜目子家を住捨て都にのぼりとどまりてひま
ゆるしをゆるめゆめと忘姫の菊を思ふらし玉島乃
なれ塩も終立ちん事をも名の縄も流るゝ思ひ子
化する世上を後川でられだばや銀乃縁が鐘をと
漕越しまの松原ほく向ふに向一里にるゝもらる子
磯砂月ちり両岸芦蘇綵くとして胡子は濤風眼
を打ち遠帆乃魚舟ゆ鳴の声かとこゝかふに夢濤乃

海棠ちかく眺むる比は鶯も寝覚寛なる比ぞ庭乃音
送る風に海せて箱崎の浦ちかん掛ね浦乃湊に草
鞋おさむきぶりハ白いも近江の野家に明してあした
目傭て起るに鰈乃裏に女の告りて今年ハ稀も
まよし老愛醉揚妃もさるちとよし天野菜玉乃出
きまと大礼なましそこの根まかせよ円をかけともれ
いかする事やらんと絶越まさらしのぞけだ五十ぢあまりの
女嫗乃羨りの娘一まて薗なる菊を愛するにても
しかも様よく見るにもおしくの名分しつるよう
ひとつく和泊の具して女ハ団扇を持て菓末なる
菊虫を拂ひて居たり。良久しくありて鬢白気之

なし。形三輪組なる菊乃己が仕業の濃作をして
おるとも見へしが。一脇に鋤鍬おろし。かの便を
なしけるよ迚ば菊畠にわれ出。嫗をも引ふ女ハ膝を
わびぬ菌とんせぬるの菊の花しけるに枝の露を拂ひ
根の雲をせらまて立ぞ。行脇する床机にありて丈
婦さるやかに飛混しておるるに娘ハうちに入ぬれ。しげ婆
殊の嬉れを刈に雲深て指出し。ぞ菊を引結て聲より嫗の前
にさし出ていぶかしそうなる気色にて死て金を
斗まつ事より八十歳の一緒を笑ひで眺し。花をよん
漸よう境男浦山敷ごとなく寄り名を聞ども語らず。其丈
よそ宿のあるじに為ぬれども菊好事さえ志てぬとぞ

答へる際乃不興氣にわられて塊をとらずもつて切て翁鍋
しいかなる塊土乃世にかくれなかりし、かく常住此悪源と成
たまに向ふ翁坊り見て悪笑で其悪源ハ嬰にてこそあれ、
三歳何乃興ふあらんと斗ふさしていらへもせねば、翁ハ興き
言葉もなくて又此塊をよく見れバ翁とたれに三入今
らふむしくも欠損す茫塊ま乃葉なすどぞてあしなの
險倉する様なるらしき、よくく有て翁ハ揉手肩かりて
あらかじめこそかつかんと持て是非にも意をも翁
なんと思つるかんにいふます菊愛して梅びし我抽値
まさ越、翁に向ひさ露みてと席しや根をとんなて
奉侍ふ銀樂自他同て中く見得とたれくこそ

待ま、法の中をと語りまうすハ吾学びかとなさせ
たまへと云バ、翁さし俯のいて我若かりし程ハ友達の
家に新しき事をのみ好みし彼者三余をかけめぐりし家
業おこたり、次元見しより八頭身に富者乃身と成後
ハ宝器をも求めて西し是よりは賤寳同じくにかさな
りてしかくにまさりて利を得事たらざなりず、縁ふ
津く浦くをめぐれども、猶ゆるよかぶ事れ里にと入ず、毒業
を恐るゝごとくにして遠ざかり、剰さへ世間にいらずバ妻
と持し過にしおもむきて居なるが、同様に只利欲の
事のミ思惟し、朝夕の食さへも庸なる喰ひ物をと茫し
あ心を労して貪婪なりしがひまして此心つき氣ハ

わづらひて癆病を患ふて若死してあまりしぞ
乃ちかまどが語(かく)まし友達らち夢てそれぞれ北の仕業や
一生かく労して財を譲るべき子孫もなし皆他人
の物となして終をも志らで死しよ人の悲を見て
己と志るところ学びぬるより母子もあまり逆ざりし
乃わる人なりしが其の中に独異人ありて深く山中に
仙竈を用ひ延寿乃方となり之を余ミハ人家を去
ちるかな乃至ら少々ずつ一年狼獣乃あつし時に
かまどが為よく心まで死しかれハ血を参山に落て命をとう
しなひおれ男ハ寿をかへらん延命をとうしなふ事兮し
て高堂男を観して今其にとかへりね

（二）細すきの翁

なにがし一日と出かけをさそはれければ、小倉の渡しを越えて下れば関とさしかかり、目を覚まして長川の萩につきてにぎはしく、其れに相よび一軒の宿をたづぬる。此の年八十余の男、昔をうめまりせんと云ひてよにともなひ、内に入りて見ればさうじもやかに設けし座敷に、すがく子郎が馬絵、同所ぬ花入のよそほひ、脇には禅指禅卓もならべたり。座にはなのままあれ物しげなるが傾きけるは、めうがの茶など出されさうんな添へしなどありて、寂しくは勝手よりは半分あまり女の此へあつかひしながら、夫婦のいとなむ細すいてあるしが、扨男奥に入りて、今日は客なしとて、明日より

せよかしといへど、女房自讃煩悩のこころにいとなみて飢を助けさせ、湯など沸かしてつつましやかにさせさうにてつらけきびしく有人の形やと感じて、夫よりは若くにてちともせで過ぎかれ相語らし、深更になれども思議さる人の夢にて迷ひ寂寞の比も心あるらしにて向ひは物ぎりしはかしぬ世語らひとらん奉公して、何とて奴婢もなく、あくまで道人の稼ぎする身とは成りたまひしかと向ひにあらたし。乃女房らいふやう、今のこころまよひしごとく、壮きを過ぐる程は人のひとも多くよりて、財産まさしとよりしくらぐるが、みな十年あまりの先非さよなら人の甥に、気随なる人に勝手を方とやらしく生まれつきたる美童ありしが。

讃岐国の太守は国に入て。是非をよめしつらんなど往
せて身にもあまる程の禄をあたへ。国は日並に
側に侍き。夜は御寝所の私に寵せられて中く日月
の光さへ及ざる程なれば。かまびすしきものもなし。
延もし。すべて事世にけがざるはなし。又かまびす
も長なるれ及び。其美質は海さり。才能もよ
のつねならず。さるにもゆくゆくは一かたちして見をも
讃岐の守につゝしみて。寵愛日ぐにすすみけるまゝに。いかれ
らが威勢は一門の婿まで。是より夫婦となりて富貴をきはま
しつ。偏に八竜の天子にあるがごとし。然れ共年緑後
乃春。彼あたりする花男となりて後は国の掟をする所

程になりにし。誅に世はなかりしの折。下ざまに
よろし娘いかりをなし。かまびすしく罪さへ国をもれ出ぬればこそ
嫉しに身を少へにはる人の法名を汚すに至る。又朋友
に体をせしまして見し、はじめその中に宛同家の禅
寒にへ書画をよくし細に。自ら切腹して死しぬ。その
身をなげし。月日は大守が前をあきれば勤め居に寵
をあたへ。久しく八失ひし事を無寵となしすべてを懸けるに
先言せしに深く心をかなしさ伝へるを年来捨てそろ
にも見ぬれは残りなく。黄葉山に欠て、殿刹こそ
ちて何国とも去て、法道に執行となりしが。其後
やすらぬの宮づくりにして乱の乃つれ果る迄へ

思ひなしく死てむや是とし三ツはれてにあ子ぞ腐き
見とよて洞襟を露すりに蟲さへ衆生まして窮ハ
折ことも共ふらまへ白そて眠ずつるが間をむすひて
給ふ今れあの者乃諸るごとく世の中萬乃事を思ひ
ますそべけりなく善悪の境をちなきんにあうしと。
かくれでとく乃男と浅果ハ世ふ死害をまぬがれけるハ
今相ふあるの人のからえの死と浅ましくありさ海を見る
その朋代ふの不切なく切なるもの八陥益ハ名ある者ハ
爵と称ぬるも、此濁世乃中に志のぎ柄のれをそら
海しても此事ハ祓禍にして何乃富貴をたれに
聡ふるも絵ふよりもけんさうりとふわりしろく。

之ぞ知とすがら絵を嘆したるに。ことし火ハもかぎ
りなく有りて消ぬ。何ぞ万男の深く無れ家となりにされ
どもあたりに此男の外よそらかに浮さむがりしこ曲
程なく暁に家を立別きつるにぞきのやどへんし落
葉れ節も絶て、更に煙立べき風情もなくきよらん色
なる草れ人をあけて旅乃名残のさらぶといへど、亭
主ハえ名むを惜むなしきにとあし浮

③ 渡し船の老人

既よりも安藝の廣嶋に出しに、築は東中國にハ
いと繁昌する町並人家乃風俗も、いとかしこげなるぞ
志ばし足をとゞめて、所の舊蹟ます寺社なども
尋しめぐりて、東の川ぐちに付つ行よ、船よりする濟
にハ人々あぶなきけぞ。嚴嶋への参詣ハとてもいふにて、梅ハ
明神への海路にてあるよし。舟長すに便をもとめて。
其嶋まつきぬほどにて、佳景靈地として並松の
鮮さとは比ぐなく、靈の小嶺の高くさへまに林・神前
ちらと出り距こるも清くとつぎよされ、漫く
之層く千浮たるに有て、磯枕の普通に遠さる

渡れ上を見れバ、旻天に霧くるゆゑ、虹のごとく曜
廻樓雲に續ひて、冥遠に海上百八乃灯籠御にあ
らはで、只蒼海を繞かとみかふ。瑤籬のうちにさし
入だ。金を鏤めたる瑤玉を敷、寶殿をまもる神籬
開に手まされて、己を主す儻くして、從侍にて擁靈
家のごとく、陽音れてごとく、不側乃神佳眼前に分明さ
見。龍をめでてせバ、須弥の頂き嵯峨とそびえ、ちら松桂に
深くして、廻あらく、後山頂脩竹茂げりあへり。のぼりん
まバ、盤石嶃く、瀑流渓に濺り。老朱天從聳すぁ
中だ、雲を帯びて、遠だ見とれ、筍へ近かつとあやしく
府て詠まだ、釣する小船乃幽ぬる里。里れ葉かり

帆風に馳す。遊冶賓客酒を携へ騒客白雲に浮る。その
眺望中く眉を掠むる程にたへぬるは。なかなか漂泊をつくし
好て見ゆるに大師乃筆の額に古人古賢の詩文
言葉を絶し書に鶴といふ。是よりは海と神仙
消てん静におもし秦つるまで直ちに城下に出んと遊
客の舟人を此ふ中しにむかふまゝなる事しも男と
のごろ乃中に多くあるとげなる様しをあまれど。なおよ
まこ遊女乃あてやかなるがあまた送る所。海とあやさの
夜おほむもともの房にて淫肆のあれど女房までおて。
様てこにてもかしつぎのすゝめ様いふゆゝしけにおもし。
纜をとけ舟に打乗ぞ。船人纜を解て押出すにあと

も咫尺に遠くなる事もなや浪風一里も漕でもらんと
思ふ時。舟長模のよせかしくれにけるぞにてうつせ人
の船路を付きたるにもあらず。異様残酵なりければ。此男と
前しをおへていふは。今宵は海に船人を世にかわりしきへ
なり。今夜風雨の塩をいはず。雷雲霆寒雲遍身をと
海上をとけるも。死をおそれ淡生をむくるしむ。是より
かまはずもおんなれだにおちしはあらじと思ふに。いらに丈
よやと笑へば。船頭きこて呼かけ。此足下のんや。従者
にいつかまは美味珍膳にあき。遊魚には長ぐ酒に酔
をすゝめて。などか郷里にいつ逢たまへど。其際の目ハ
憂々なりん。たれにも称ふ所あるも。我と足下と同じ

人だ一月を越時(とき)をいへども一時をかへらざる也。たゞ今乃楽(たのしみ)ハ
明日(あす)の身をしらぬふあらバ。先(さき)乃ことハ今此楽(たのしみ)こそあらバ。
憂(うき)ある事と(とゞろ)も同じ。さもあらバ暁(ちうは)ハ何やら寝(ねず)ならひな
なき思ひまハし。思(おもひ)つめたる事ハ世を渡(わたる)
のこゝろハ命をも寿(ことぶき)まで。あるなどとおもへバ。宮(てく)をもて
て天(てん)を見れバ。たゞ渡る事をも思ハず。縁(おもと)をこゝろよせ
らずとふかく。清江(こまま)を閉(とぢ)て眠(ねむ)りけり

（廿）鞆乃医王寺

時雨ともまさで淋しく雲飛んで葉散て天籟峯
乃景に数よやや文備後の鞆につきて寓かして
と見んありく内野来の寂然しる寺に憩ひし立
取りて見渡よなるなどと語つまよりハたると
げなる庭まハ雪のうき蕉の葉鶯かつかなど
四隣を掩ひ岩に苔むし石碑崩まで一木の松ハ
おのれそぶちなりね寺の名を問ひむし平氏の流
小松三位の建られしと云に於て文盛興をたてし
て此名斗ハ現まで其人ハいつの世のむかしかと思
ひけるなの数添ま草鞋をならめて立出る

こ浦に帝立文を隔てつゝあすなる磬の響き木
魚の音きこえけれバいと殊人の世をわすれ給て無常風
速すなるを射るおもひ身乃心にぞ清めるやうんと思来く
こち私をりに線香にすゝりける圓窓あり是よ至
内なさうのぞき見るに浄年の程五十斗の僧の髪
うちかぶりて爪長なる禅草をはきて誦経するにて
あるも乃は思ひ勝なきに数を言ひ寧してかく
脚さ涉すればげや法経も綴てよりて文草に入給ふを三
拝して於奄中にあるにかの目と某首垂る鳥の
声いかへきかくと思ひ傍をたびたび和まき思ひし足を伸
めんと和尚に従て外に哀猿呼び鳥樹下に

音すなはしとど其懐のあなたに男女の声しきりて、さて
やがて物云あるよいとゞかしく耳を属てきくに、親の
許さぬ縁を結して人目の関もうるさし、諸共にひする
人の道行にてあるとなり。其物語いとあさまし。母の
うき様すぎさらしむ。後世の契の事さへつましげ
に涙川笑川する中に、此世にてこそ永く契もかなはね。
夫婦とものになしてんと思ふもよしなや。のがれね
因果の化名ゆるさねにてこそ人の物ふ語とも乱る乃
うへさとかに愧ましべ、外文様すれ候なし。父母の
あい見にくきさへ、とてや多れたん出てなんど胸う
こそれ息を殺しくかく思ふよるほしてゆふとれ最后

子殺いろまかぞへん。ちと〜を聞だ皆生さと諦と
乃ゆ、ほゞかし。いざ此生まを観て他生を契らんよ
など。念佛も称ると聞くへ心嘆と云ふ歎しき云夫を
後の物音とな聞て、我不審に思ひて、母乃
くりきさよ。ま扇を明て入れたに、いかなる有様
女のいたま衣がかりなかが二人、草に枕して、此
あばし。幸い日頃よに心をあらしきへ人の志なれ
あるかなる人々をちらしらかずして其親しきこその集ま
まりてかれしむる人を更へ、あそかなとなし、とりかし
て二人を墓に一つにて弔ひ、其後ほど人母はに無
此死人もこれ弔ひてなげきかなしむ也、物よのあはれ

はあやりに奇なる人ありし。或夜月と翫めすて、星を
まれなるは五十あまりの翁。鴫なりぬ鞍にやさしげ
なるを携へて奇なる何国の人か。問ふに
芋されは檀方寛附の者と答ふ。志だくて梧を入れ
ば寛仁大度にして常の人にあらず。家にも
に向ふ仮に程遠き裏に妖怪ありとて耳入すく
なし。さるに何乃わけもなく家へきたる
そうと云ひ翁こうへて、めづらしく人間のありけれ様見
住ちは翁を惜しなんで家にかへりん。夫えて此後
あふなるをさるがゆへし、夜ま婦菱をさし侮せよ又
来たる翁て八二人が中の熟しけ。和す事太かさな
らば只よそに恐るゝ人もなく下に押ふ人もなく寒温
の境もしらねば衣服の貪りも銭宝にこゝろもなし。
天上のたのしみも又人間の極みも手にいりが快楽
を捨て今家に住む人の此まる事あらんや。こゝに志まさた
相て侍るにも無しと翁ふ。相しき人の形とゆく勢ふして
明け日かれが家にたずね行て見るに、市中に商業
いやしげなるあきびと、物静かに住なしたるに内
に入りて見れば、家のうちには種々の草花さまざまの植
えて侍るかと、見て脇に机戸を構へて二人の男酒を
吾み魚乃むさぼひをなしてあそびし。我も近ちかく
見よげなるがうちに翁んはせて席にすゝめて語る。いま

されバとて何ゆゑ郎平なりと若ふ是とも辞ゆ
たけくれに智沢人其ハあしびぢぞらし結びて其
称を去て他乃人々げ着をとりたに常に恨をげ
なる名なし家ハ郷乃業をなす身に糧をもとめ
身ハ讃岐乃船客を請て世のわたりくなし此志るとも
一毛も利欲なし若き商賣に利をもとめてかせ
ぎあつけれバ心中酒に遊びし其ハ僧に施を計り。
ほまかへすつ強の邪をなすの沢儒学あれど一日も
身に相接して粉骨沢草花だま蹴鞠やし此抱を求
めるみ是にふとうに於ハ小松禅寺乃廣端
にまでまかりて桂庭花て菓す清なる

毒を誠めんと笑ひはかり是を愛したまへりますこし
し家業乃向をかへてハ歌書を読てたのしみ自身
を労して人乃労を拂ふ海をめぐらしき男とぞ不便
事ぞもとに結じよ深くかんじて又是隠れと見えれど。
門口乃志るしに舛屋と書や額表ありけし

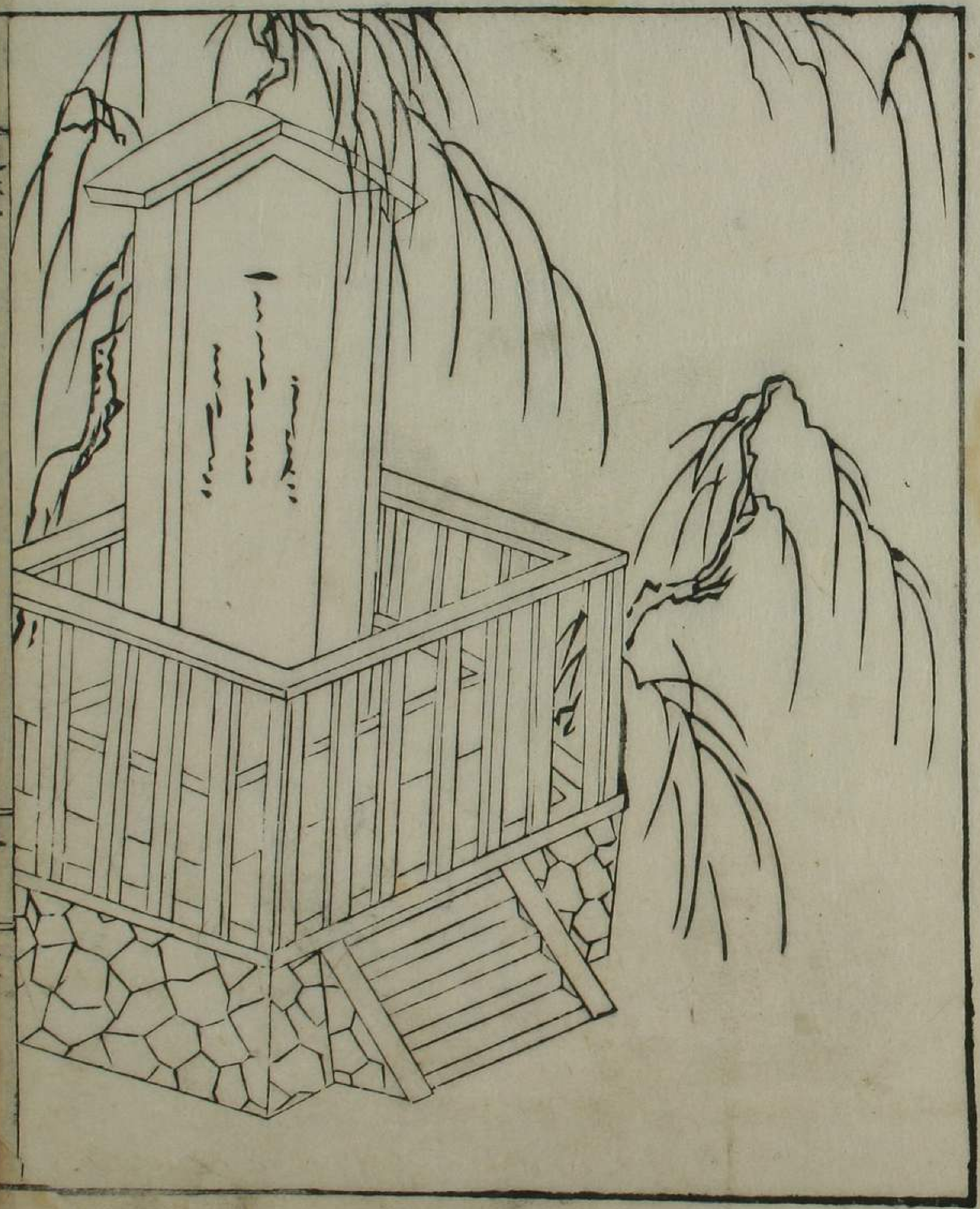
（五）備前乃水茎

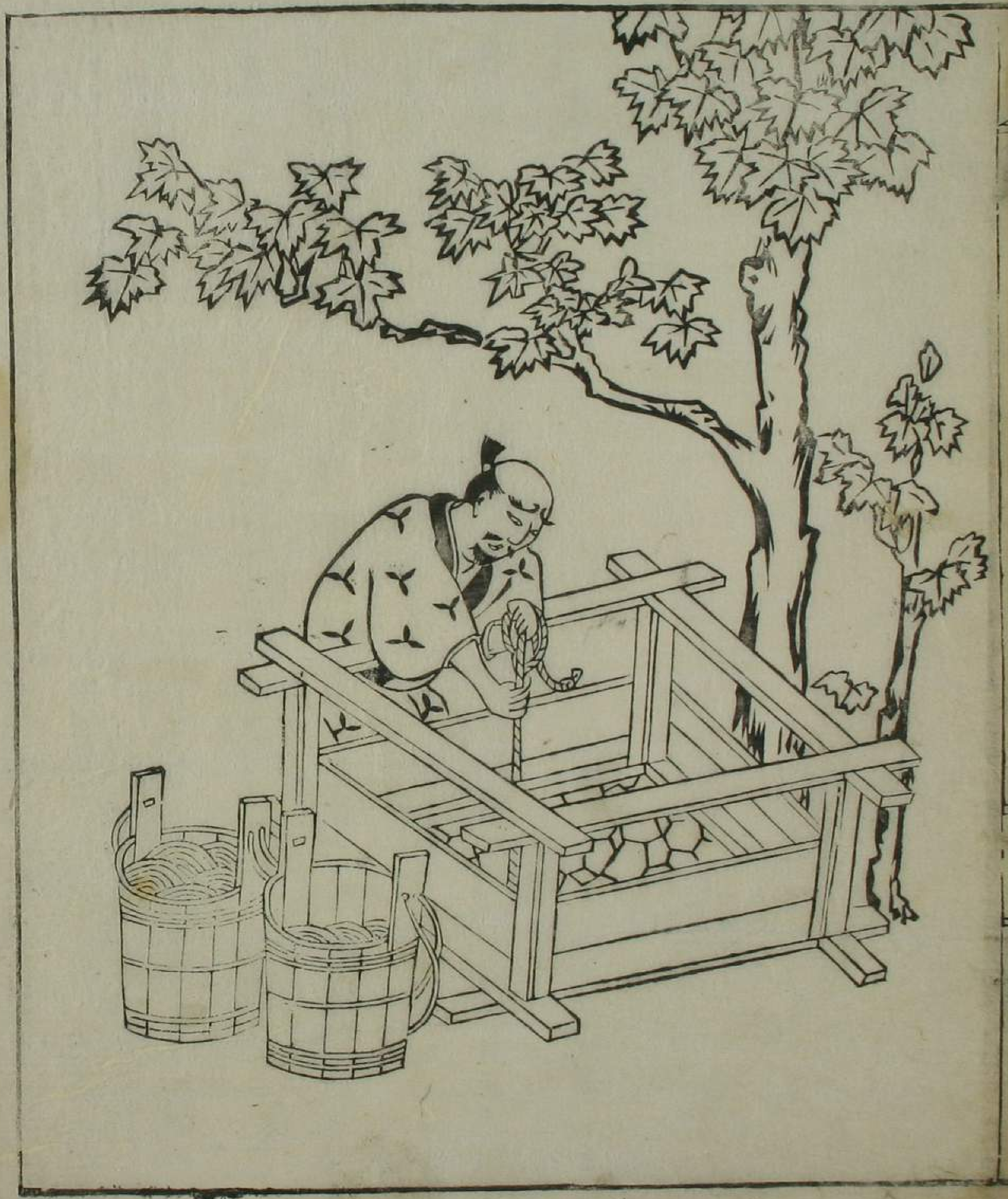
是より船に便して備前の黒山に志しおもむく帆
風はやくて備中の沖をわたり過まだいそぎに祭
さく花を弁乃姫の廟残して朝とさらめ〱きよこ
内に出ししゆく楽しく夜毎人に折の淋しさと海さ
見て寺にゆけば風景をなすうち讀し有明乃廻
門はあきなりんといふものと思びがてきに鹿鳴の泊
舟あけすれば浪間の寺のこかげに宿しと見すまで
あやしき妙なる曲に我国なりぬ異形来て湘妃の琵
曲どもきくかと思しく大嶋の曙まで漁路の嘈ぐ朝
にぎわしきを見つゝ三里の川口を漕入鞆の寺にまゐるまゝし

あれたる所に又さまよひしに年の程四十あまりの男の
桶に柄杓を添え携へ肩に痩せうして荷物て竜あり
いかなる者かと道通人に問ふに彼れは三とせ已前よ
り此の宮につかへてありしに主人は太守の命に遠くむか
しく成給ひしが子孫さへに絶ぬれば弟子親しきものも
連も遠き所に葉を成なき故骸骨むなしく野径に捨
おかなしき死かれの露の哀しくおもひに朝夕かくる事
して己飢なから石碑立べき望あるもいまだやく
手の縁を念仏にいとなみしも以て今汲水をこの寺に
こぼさす便と求むるにやあらんと語り捨て行
通りの人の恩を感じ菊に寄る燈を重て水汲人よ

逢ぬ。山の奥へとたづねんと志てやどし迴るにも飽ふ
明て閑なく件乃男又我を訪て來るを志ぶしと
呼入て常の挨拶をおしてのちきみに足下の噂を聞く。
亡君の為にかくし身をやつし。退隱乃活業などいとなミ
居玉ふよしや此事中よりも意の趣を覚えて心やすく
まの身へ奉仕ぞかし。志かし我れも今は身の安
辞も仲に出て亡君の孫をまた早ひ居りんとするもあはれ
べきにかくこそ遣被るる下職いかなるん事と向ふ
男答て左れバ居玉ふも理りあれど身辞者をなさで
また後まで心をとゞめしハ只。気を養ひ氣を
養ふハ心静なる初めなり。水を見れバ静なる物の極まり

なり。静なる物へ手持乃外をとらて成べく。今も又静なるを
ハ物の鏡より傳聞屋静閑寂寞無為ハ萬物の
本なりと云ふ心をもつて静をかくと身を苦しめて
心のまづしきを遠ざけ身を全くして母を執んとわがところ
静さとはゞ儀を云事を志る但しわが家かくしく候
殊んとすれバ國乃為にあれて難儀いるとさとめ
きば男をつまずりし後まで向かひ古庭となれりて近く
若をつく活とかや





貞享三丙寅歳
孟春良辰
攝陽順慶町心齋橋筋角
書肆　河内屋善兵衛刊